

ニューノーマルでの応用物理学会の挑戦

波多野 睦子*



COVID-19 パンデミックに見舞われた1年半は、公益社団法人が果たすべき役割は何か、と根本に立ち返り、変革のチャンスと捉え、“応物ニューノーマル”を具現化しています。会員の皆様方のご協力と事務局のご尽力、そして何よりも多くの応物愛をいただき、横断的な活動に挑戦しています。

特別 WEB コラム「新型コロナウイルス禍に学ぶ応用物理」は、社会的課題への横断的な取り組みの1つです。応用物理の役割を改めて認識し、知の統合と創発、科学リテラシーの向上、小中高校生の理系進路選択などに役立てばと期待します。次はGX (Green Transformation) を企画しています。「応物セミナー」も本会の資産を広く提供する知の好循環となっています。今後も社会的課題に対して意識が高い本会としては広く活動を展開し、ビジビリティの向上も高めていきます。

国内最大級で初のオンライン開催となった昨年秋季講演会には、過去最大の約9000人が集い、聴講が500名を超えるセッションも複数ございました。特に関心が高い分野、企業や海外からの参加者数などのデータが分析できるのもオンラインの利点です。今年春季はさらにグレードアップ、特に臨場感あるポスターセッションが好評でした。また中高校生が参加し、未来の人財育成につながったことにオンライン講演会の可能性を感じました。しかし現状に満足せず、ニューノーマルでの理想的な講演会を追求するのが応物のDNA。特に学生や若手が対面で議論できる機会をつくりたい、とこの秋は名城大学、現地実行委員、事務局のご尽力により、40 パラレルセッションからなるハイブリッド講演会体制を構築してリハーサルも行い、万全の準備ができておりました。残念ながらコロナ感染症状況の悪化を鑑み、

完全オンラインに変更しました。得られた知見は本会のパワーアップとなり、近い将来に生かします。

さらに、本会が100年を迎える2030年以降も魅力ある学会として輝くために、中長期的な各種施策を開始していますので一部をご紹介します。

学協会の国際協創は、政治・経済の分断化が進む現在、重要性が増しています。オンラインを活用し、世界の物理系学協会のRoundtableがスタートしました。またアジア地域との連携は、今号でもご紹介のあるAAPPS (17カ国からなるアジア太平洋物理学会連合) との協業を具体化しています。主事業の英文論文誌は、IFは向上していますが、オープンアクセスやプレプリントなどによりジャーナルの在り方も大きく変貌しています。国際的評価の向上も含めた中長期戦略を策定しています。

ダイバーシティ・インクルージョンは新たな価値を生み出す原動力です。意思決定の代議員や理事の多様性促進、Z世代の活躍の場もつくっています。相互コミュニケーションの場「応物カフェ」も、ネットワーク形成にご活用くださいませ。また産官学協創が特長の応物としては、企業の皆様に魅力的であり続ける必要があります。一方、企業は利益のみならず社会的責任も求められるようになり、本会の重要度は増しています。そこで将来のイノベーションの創出も期待し、オープン・クローズド戦略に対応した有機的な場として、産学連携委員会を設立しました。

世界や社会が急変する状況では、従来のPDCAサイクルでは不十分であり、多様な皆様のご意見を重視したOODA (Observe→Orient→Decide→Act) ループで機動性を高め、試行錯誤していきます。

さらに皆様のお知恵とご協力を賜り、そして応物愛で本会をともに育てていただきますようお願いいたします。

*応用物理学会 会長、東京工業大学 工学院電気電子系 教授